
世代差から見た異文化接触への影響

高 取 康 之

はじめに

ここ10年ほどで、多くの外国人が日本に流入するようになってきた。それとともに、外国からの様々な文化ももたらされた。それまでの日本社会では、他の国の文化や人々と接する機会はお世辞にも、活発であったとは言えない状況であった。我々日本人は歴史的に、単一国家、単一民族と言う枠の内側で、外からの物を排除し受け入れない姿勢を貫いてきた。

日本人はアメリカがこれまでに戦った敵の中で、最も気心の知れない敵であった。大国を敵とする戦いで、これほどはなはだしく異なった行動と思想の習慣を考慮の中に置く必要に迫られたことは、今までにないことであった。我々は、我々より前に、1905年に日本と戦った帝政ロシアと同じように、西洋の文化的伝統に属さない完全に武装され訓練された国民と、戦っていたのである（ルース、ベネディクト 5）。

我々日本人には日々生活している中で、我々自身の生き方が他者から見てどのように写っているのか計り知ることは難しい。西洋の人々から見て我々日本人の文化や生き方は特異なものに見えたのであろう。その特異な日本文化に大きな転機が訪れたのである。

世界がボーダレス化して、コンピューター、主に電子メールを媒体としてリアル・タイムに世界中の情報を収集することが可能となり、我々の生活は一変した。いつでもどこでも必要とあらば、情報にアクセス出来るのである。外国人の流入によって直接もたらされる外国の文化とは比べ物にならない位大量の情報が、技術革新の産物としてコンピューターを媒体として我々の下に集まるようになってきた。諸外国との人的交流のみならず、様々な手法を使い容易に外国の文化と触れ合うことが可能となった。

戦前の日本、戦後復興期の日本、バブル経済に翻弄されてきた日本、そして現在の日本と変遷してきたわけだが、その中で日本は文化的にも大きく変貌を遂げてきた。戦前、戦中、戦後の日本人の価値観や生き方を現在の日本人と比較してみるとその差は歴然としている。しかし、はっきりと言えることは世代の違いに関係なく、情報のグローバル化の影響で、誰でも比較的簡単な手順を踏むことにより世界の人々や文化などに接することが可能になった。誰もが、大なり小なり外国の文化や人々に興味を抱いていることは間違いないであろう。それが、ネガティブなものであるかポジティブなものであるか断定はできないが、少なくとも外部の状況の変化に目が向いているのではなかろうか。

異文化との接触を試みようとする、育ってきた環境（家庭環境）、教育水準そして社会環境が大きくその接触の仕方に影響すると思われる。そこでキー・ワードになるのが世代差である。日本がこれから先も、世界との人的、文化的交流が拡大していくことを否定することはきわめて難しい。そのような状況の中で、異文化と接触する機会はおのずと増していくことであろう。本稿では世代の差が異文化接触にどのような影響を与えるか論述し、将来日本がどのように変貌していくか展望を述べたいと思う。

1. かつての日本人

世代の差から生まれる価値観や生き方の違いを語る上で、歴史的に、日本人がどのような価値観を持ち、どのような生き方をしていたのかを述べる必要があると思う。現在の20代、30代そして団塊の世代それ以前の日本人の物の見方や考え方は大きく異なる。しかし大きなターニング・ポイントは第二次世界大戦をはさんだ時期であろう。それ以前の日本人の価値観と生き方を引き合いに出すことも、日本人観を述べる上で必要であると思われるが、現在の日本社会を担う戦後世代を語る上で、それはあまり大きな意味をなすとは思えない。団塊の世代の両親の大多数が第二次世界をはさんだ時期に、人間形成がなされたと思われるので、その世代に育てられた団塊の世代の集団が人間形成の上で大きな影響を受けたと思われる。そこで戦前の日本人の価値観や生き方に触れることは避けることにした。

人間は社会の中でその人生をまっとうする、その社会の最小の単位が家庭である。家庭の中で人間は生まれ、成長し、やがて自立していく。そういった意味で家庭は人間形成に大きな影響を与える。果たして戦中の日本人はどのような環境で人間形成をなし、社会に適応してきたのであろうか日本人は誰でもまず家庭の内部で階層制度の習慣を学び、そこで学んだことを経済活動や政治などのもっと広い領域に拡大する。彼は、それが実際にその集団の中で支配力をふるっている人物であろうとなかろうと、とにかく自分よりも上の「ふさわしい位置」を振り当てられている人々にたいしては、あらん限りの敬意を表することを学ぶ（ルース・ベネディクト 67）。

家庭と言う社会の最小単位の中で、日本人はマクロな意味での社会構造を学び、それを社会生活に応用していくのである。このような姿勢を養ってい

く上で、家庭の中での親と子の関係、夫と妻の関係そして兄弟、姉妹の関係が大きく寄与している。社会の最小単位である家庭の中で、「ふさわしい位置」を振り当てられている人々に対する敬意の表し方の基礎を学びとるのである。たとえ表向きであろうと、なかろうとその姿勢を示すことが強く求められる。

表に面した部分は実際の支配関係に合致せしめるために変更されることはない。それは依然として侵すべからずものである。形式的な身分の拘束を受けないで実権をふるった方が、むしろ策略上有利でさえある。そのほうが攻撃される恐れが少ないからである（ルース・ベネディクト 67）。

2. 戦後の日本人（団塊の世代）

戦争の終結により、それまでの閉鎖的な社会から変化の波にさらされることとなった。西洋の文化、風習が大量にしかも自由に流入してくる時代になったのである。それらの変化が、それまでの日本人としての価値観や生き方に、大きな影響を与えたことは言うまでもあるまい。押さえつけられてきた社会に、大きな風穴を開けられたわけだ。

社会人類学では、「文化」は考え方、感じ方、行動の仕方のパターンを総称するものである（G. ホフステード 4）。

新しい価値基準や風習が日本に入ってくることにより、人間の生き方の根本となる文化に西洋からの文化が刺激を与えたのである。現在日本の団塊の世代と呼ばれるグループは、日本人の価値観や、生き方が大きく変化した時期に青年期を過ごした世代に育てられた集団である。ゆえに、上記で紹介した日本的階層制度を家庭の中で教えられつつも、世間に広まる西洋の価値観

と文化の狭間で育っていったのである。

個人のパーソナリティーは、それぞれの人に特有のもので、メンタル・プログラムのこの部分では他者と共有されていない。パーソナリティーは、その人に特有の遺伝子によって受け継がれた特性と生涯学習された特性の両方に基づいている。「学習された」とは、その人だけの個人経験の影響だけでなく、集団的なプログラミング、すなわち文化の影響によってパーソナリティーが変容することも意味している（G. ホフステード 5）。

社会が大きく変わり、その枠の中で生活を送って来たものが、何かのきっかけで大きな変化を体験し、それまで享受してきた価値観が他の価値観から影響を受けたことにより人間のパーソナリティーが変わる。それを体験した世代に養育されることにより、以前の価値観とその後の価値観を同時に体験することになる。

文化は、集合的に人間の心に組込まれるものであり、集団によってあるいはカテゴリーによってそのプログラムは異なっている（G. ホフステード 5）。

日本が西洋の影響を受け、日本固有の価値観との狭間で戦後の復興が進んだ。日本人と言う集団が第三の方向に向かい変貌を遂げようとしていた時期である。その後朝鮮戦争がきっかけとなり、日本の景気が右肩上がりに成長し、本格的な戦後日本へと移行していった。このころになると、団塊の世代も青年期を迎え、本格的に社会進出する時期が刻々と迫ってきた。60年代、70年代と日本の景気は好調で、日本の技術力が世界に認められ、もはや戦後日本という言葉が似つかわしくない社会になった。団塊の世代はその急成長を遂げている最中に青年期を過ごし、その社会と共に、成長して来たのであ

る。彼らの生き様にこの日本の劇的な変化が、その後の人間形成や価値観に様々な角度から影響を及ぼしたことは言うまでもあるまい。

3. 団塊の世代の子供達

現在おそらく大多数の団塊の世代の子供達は、20代前後に達していると思われる。日本の社会において、中核的存在となった団塊の世代とその子供達の異文化に対しての考え方や、姿勢を比較することが、これから異文化にどの様に関わっていくのかを占う上で重要なカギを握られるので、あえてこの二種類の世代にフォーカスしてみることにした。

1980年代後期以降外国からの労働者の流入が本格化し、日本の社会に異文化という言葉が一般的に浸透してきた。しかし、1990年の「出入国管理法」の一部改正により、中南米やアジアから家族ともども日本社会に生活レベルでの流入が始まった。本質的には、労働力としてではなく、それぞれの国の民族的なルーツとアイデンティティーを持った人々が、日本に移り住んだ状態である。言い換えると、生活レベルで異文化から来た人々と接することになったわけだ¹ (広田康夫 22)。

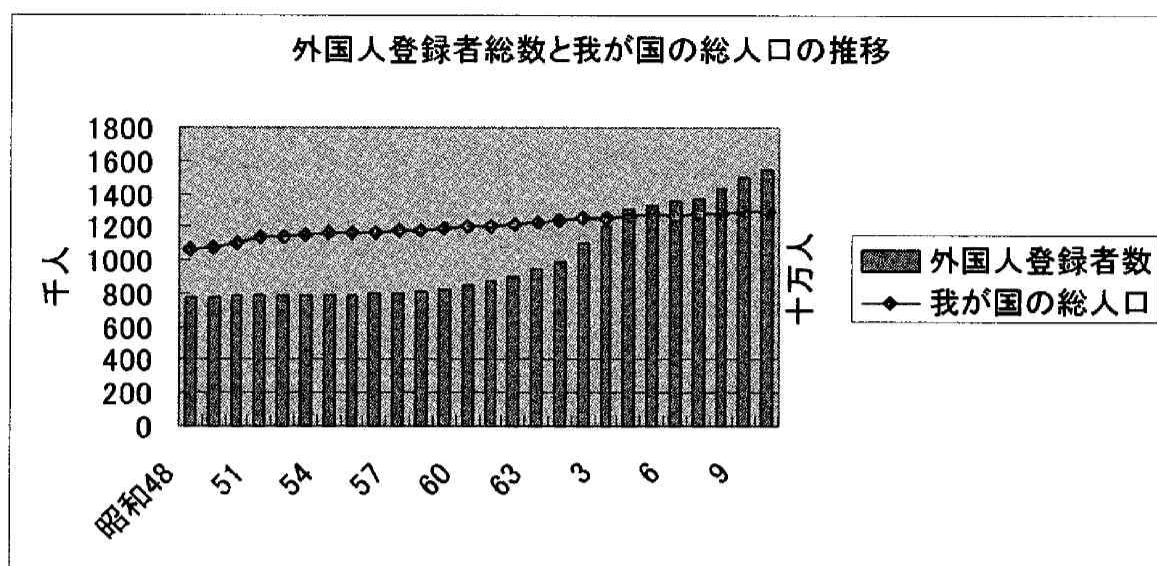
団塊の世代の子供達は、その時期を前後して生まれ育っていった。そういった意味で彼らは、外国人（異文化）と隣合わせの状況で、日々の生活を送って来たわけである。街中で外国人を見かけたり、外国語を耳にすることはもはや特別なことではない。マクロな視点からも、日本の社会は大きく変化し出すのもこの頃である。携帯電話の出現や、コンピューター技術が発展し、家庭にパーソナル・コンピューターが普及し始めたのもこの頃である。現在では、インターネット等の技術革新により、世界の文化に手軽にアクセス出来るようになった。さらに異文化と接触する事が容易になり、同時に異文化に接触することが、特別なことではなくなってきた。当然1980年以前に生まれて、その頃成人に達していた世代と比較すると、外国人や異文化に対して

のイメージにはかなり違いがあると考えられる。

日本で生まれ、成長し、成人した日本人は、自分が日本人であることや日本人に特有な行動様式、価値観などを身につけていることを強く意識することはほとんどないだろう。ところが、そのような人も、異なる文化に出会ったり、その中で生活するようになると、なんとなく違和感を感じたり、自分が日本人であることを認識したりする²（渡辺文夫 147）。

国内にもアイヌ民族や在日朝鮮人が存在し、日本が単一民族、単一国家と言い切ることは出来ないが、基本的にそれらの事実を除けば、1980年以前の日本社会では異文化との接触が希薄であり、日本の文化が生活においての全てであり、当たり前であった。そのように考えると、突然の外界からの侵入者達に対して違和感を感じたり、自分のアイデンティティーを意識することは至極当然のことと思われる。Hall（1959年）は異なる文化の中で育った人々は異なる仕方で学習するようになる³と言っているが、団塊の世代の子供達の育って来た生活環境は、異文化と隣合わせの新しい環境で、それまでの日本にはなかった新しいものである。自ずと、それまでの世代とは異なる仕方で、異文化を学習していることになる。

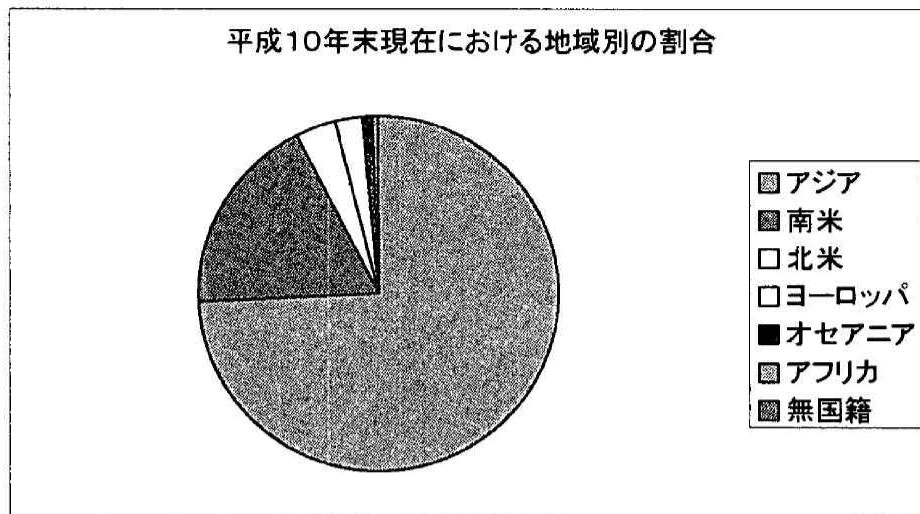
ここで日本に流入してくる外国人の人数や傾向を様々な資料を使い説明していくことにしよう。まずは外国人登録者数と日本の総人口の推移を示して見ることにしよう。



資料 法務省入国管理局「在留外国人統計平成11年度版」

外国人登録者の出身地域を見てみると、日本に永住している外国人の殆どが、アジアから移住してきた者で占められている。上記でも述べたが、今度はより細かく見ていくことにする。実にアジア系定住者は、外国人全体の58%に上っている。その後に続のが、南米地域から移民して来た者達で、32%を占めている。両地域を合わせると、外国人登録者の82%にも達する。残りが、アジアと南米の両地域を除いた国からの移民と言うことになるわけだ⁴ (在留外国人統計 5)。

なぜこの二地域から、集中して日本に移住してくるのかは定かではないが、おそらくアジア系の移民に関しては、在日朝鮮人と韓国人の数の多さが影響しているのであろう。南米からの移民に関しては、かつて南米に移民した日本人の末裔達が、職を求めて日本に移り住み始めたのであろう。しかし何よりも同じアジア系の血筋、文化背景や民族性を持ち合わせていることが大きな要因と思われる



資料 法務省入国管理局「在留外国人統計平成11年度版」

かつての日本では考えられないことであるが、外国人と言えは特別な集団であり、ごく一部の人々の周りにしか、存在しないものと思われがちであった。しかし、最近は町を歩いていても、外国人と結婚した日本人を見ることは、決して珍しいことではなくなった。毎日生活している中で、外国人の存在が不自然なものではなくなり、ある意味、社会の中に溶け込んでいるようにも、感じられるようになってきた。テレビなどでも、国際結婚したカップルを取り上げる番組も同様に珍しいことではなくなった。

以前はあまり見られることはなかったが、最近の日本の学校で比較的頻繁に混血とおぼしき子供達を見かけるようになってきた。彼らは、ごく普通に日本の学校で、日本人の子供達と一緒に学んでいる。このことは、外国の文化のみならず、外国人の血を持った人間が、日本の社会に浸透している証であろう。着実に日本で多文化化が進んでいるのである。

そこで、今度は具体的な数字を挙げて説明してみよう。実際統計を見ても、国際結婚の件数はかなりの数にのぼる。平成元年から10年までそれほど年毎の大きな変化は見られないが、70万組以上のカップルが毎年誕生している。では、平成元年から平成12年まで具体的に何組の国際結婚カップルが毎年誕生しているか、数字を示してみることになろう。

平成元年708316組，平成2年722138組，平成3年742264組，平成4年754441組，平成5年792658組，平成6年782738組，平成7年791888組，平成8年795080組，平成9年775651組，平成10年784595組，平成11年762028組，平成12年798138組となっている⁵（入国管理統計年報 430）。

平成元年から平成3年にかけて段階的に増加している。その後，平成4年から平成5年の一年間で際立って増加し，それ以降平成6年から平成12年まで，比較的小さな増減を繰り返している。

4. 異文化接触に関するアンケート調査

これまで，団塊の世代とその子供達に当たるであろう世代が，どのような環境の下で育ってきたか述べてきた。同時に統計を示し，日本に住んでいる在日外国人の状況を説明してきた。国際化，ボーダレス，インテグレーション，グローバルスタンダード等，とかく世界と日本がまるで共存し相互理解しているかのごとく，この種の言葉が乱れ飛んでいる。

しかし，これらの言葉が，一人歩きしているような気がしてならない。みな言葉では世界が一つになったとか，国境を越えて世界に羽ばたき始めたと現在の社会を見る向きが強いが，果たして我々一般の人間は諸外国の人々や文化を理解して，受け入れようとしているのだろうか。

己を習う上でもっとも効果的な方法の一つは，他者の文化を身をいれて学ぶことである。他者の文化を学ぶことは，ふだん気がつかないようなささいなことがらに対しても注意を払うことを余儀なくさせるからである（エドワードT. ホール 53）。

真の国際化，異文化理解をしようとすれば，予想される問題に真剣に取り

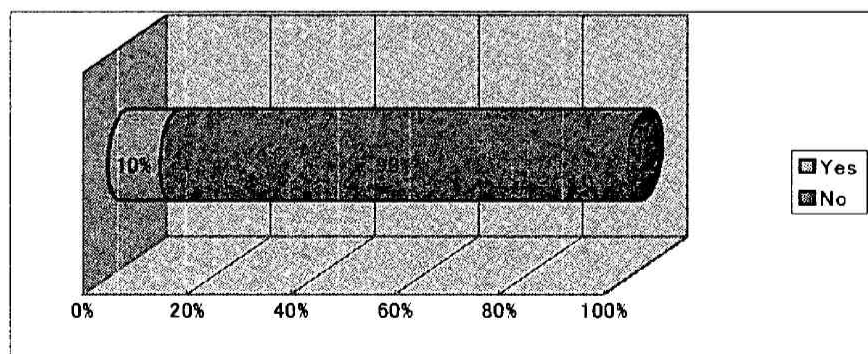
組まなければ実現することは難しいのである。言葉で語ることは易しいが、非常にデリケートなことである。文化の違い、食習慣の違い、宗教の違いと超えなければならない問題が山積している。特に宗教の問題はシビアであり、時として宗教上のトラブルで戦争に発展することは決して珍しいことではない。

そこで、異文化に関する意識調査を実施することにした。上記でも述べたが、現在の日本を支えている中核をなしているのが、団塊の世代である。そして、これからの日本の将来を占う上で、キー世代であるのが団塊の世代の子供達に当たると言う見地に立って、調査を行うことにした。無論、より広い世代で調査することが望ましいことかもしれないが、社会に大きな影響力を持つ集団で調査を行うことが、より正確に日本社会の状況を反映するとの考えから、あえてこれら二つの集団に対してのみアンケートを実施することにした。被験者はそれぞれの世代男女100人、男女それぞれ50人で実施することにした。被験者は、団塊の世代の両親を持つ学生から抽出し、両世代同じ内容のアンケートを実施した。

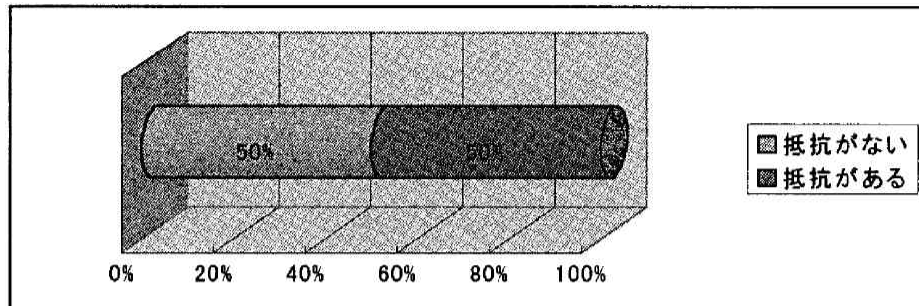
1. 性別と年齢をお願いします。

19歳～24歳

2. 職場もしくはクラスメートに外国人はいますか？



3. 外国人と接触することに抵抗がありますか？（コミュニケーションを取ることも含む）



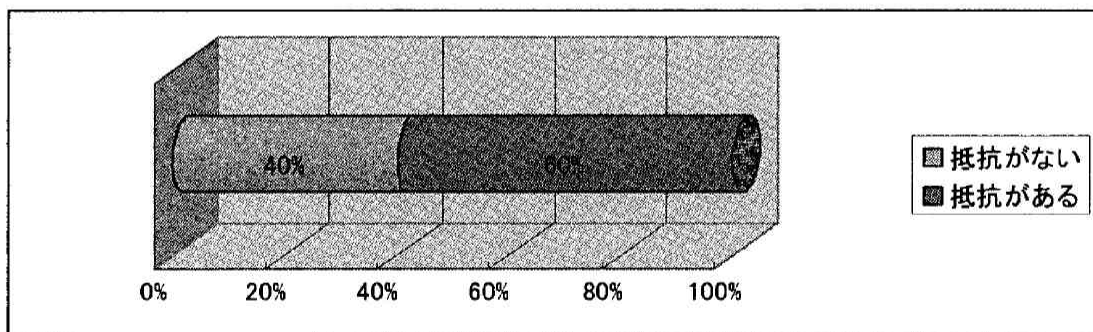
抵抗があると回答した者達の主な理由としては：

1. 外国人はなんとなく怖い
2. 言葉が通じない
3. 相手のことがよく分からない

抵抗がないと回答した者達の主な理由としては：

1. 言葉が通じないが、一緒にいて楽しい
2. すぐ仲良くなれる
3. 異文化との接触が新鮮
4. 日本語が上手い外国人が多い

4. 日本文化および社会に外国人が入ってくことに抵抗がありますか？



抵抗があると答えた者の主な理由：

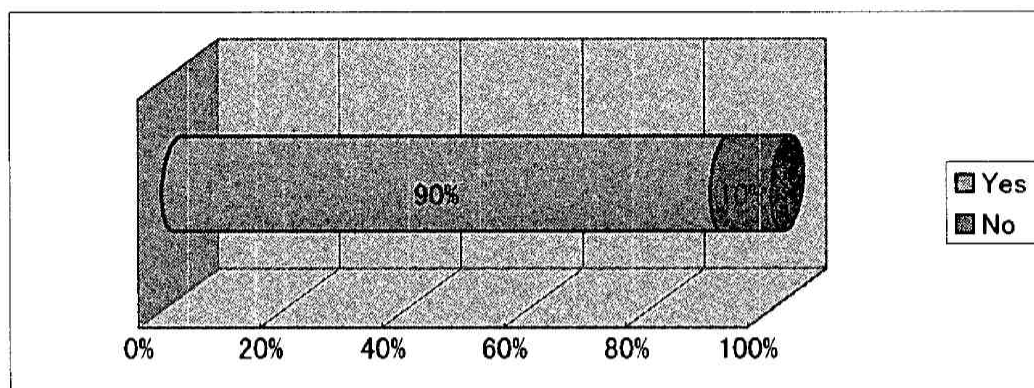
1. 日本が外国からの文化の進入によりバラバラになる
2. 異文化に対する違和感
3. 英語がしゃべれない

抵抗がないと答えた者の主な理由：

1. 言葉は通じないが、一緒にいて楽しい

2. ジェスチャーでなんとかなるから 3. すぐに仲良くなれる

5. 外国の文化に興味がありますか？



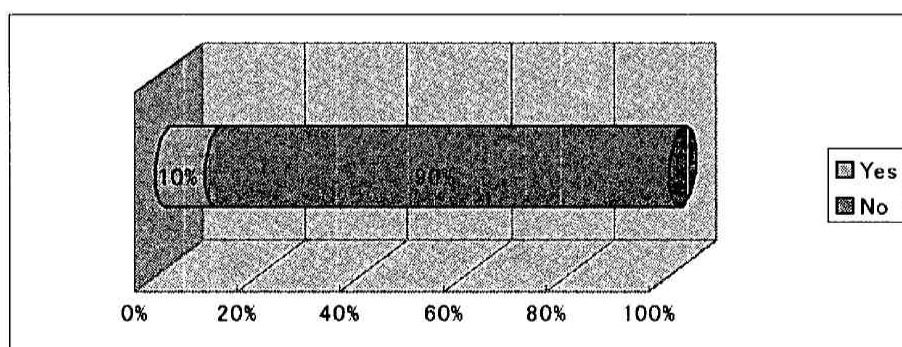
興味があると答えた者：

1. アメリカ（音楽やスポーツ）
2. ヨーロッパ（スポーツや文化）
3. 日本の文化との違い（特にどの国と特定せずに）

興味がないと答えた者：

1. 日本の文化が好き
2. 諸外国の文化に興味がない

6. 外国語を学ぶことに抵抗がありますか？



イエスと答えた者達の主な理由：

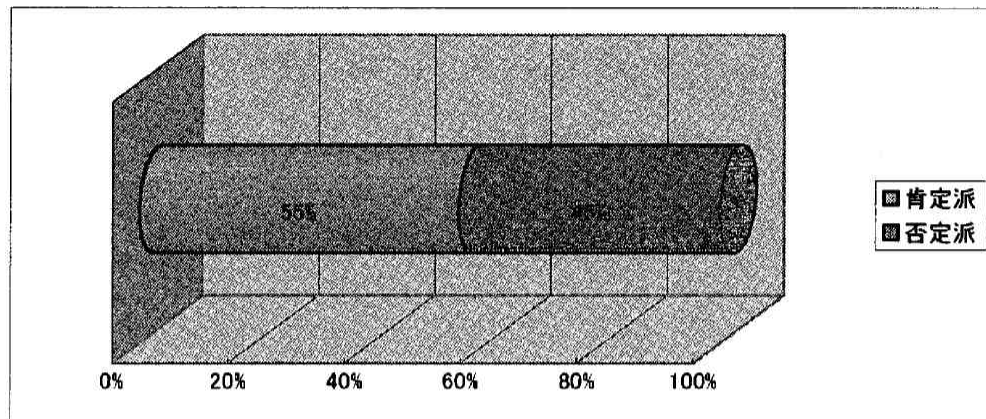
1. みなが特に英語は必要と言うから
2. 国際化の流れの中で必要と思う
3. 外国語をしゃべれれば視野が広がる

ノーと答えた者達の主な理由：

1. 難しい
2. 今は必要があるとは思えないから

7. 国際結婚についてどう思いますか？（肯定的ですか？否定的ですか？）

理由をお願いします。



肯定派の主な理由：

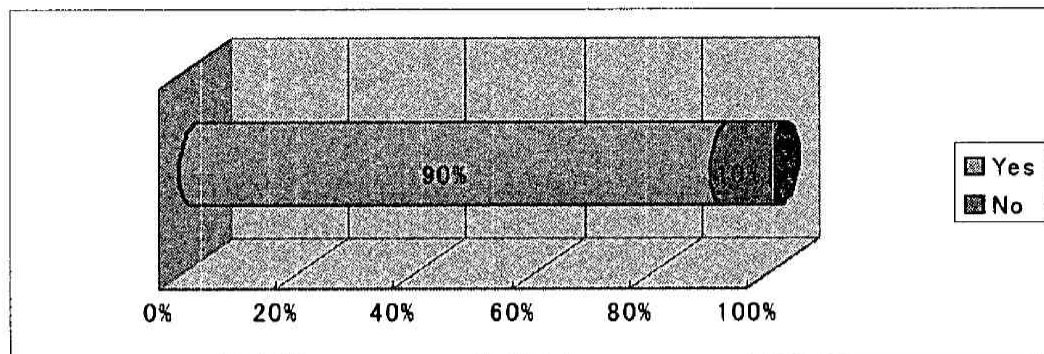
1. 本人の自由
2. 二人の気持ち次第，他人がとやかく言うことではない

否定派の主な理由：

1. 文化が異なるから
2. 日本人同士でもうまくいかないことがあるのに，異文化圏からきた相手と果たしてうまくいくのか不安である
3. 子供の問題（肌の色の違い，国籍の問題，いじめの対象になる可能性）

8. 日本で外国人との共存は可能だと思いますか？

(イエスもノーの方も理由をお願いします)



出来ると答えた者達の主な理由：

1. 日本の文化に合わせることが出来れば可能である
2. 日本を好きになれば可能である
3. 日本の規則に従うことが出来れば可能である

出来ないと答えた者達の主な理由：

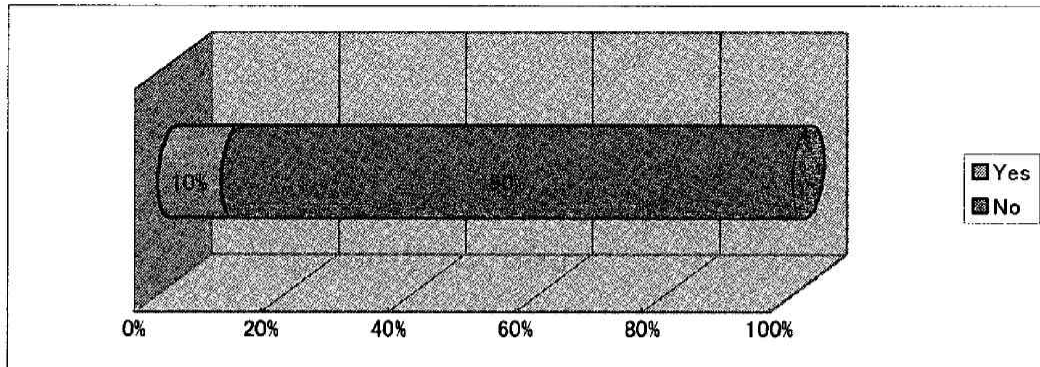
1. 国民が外国人に慣れてない
2. 犯罪が増加する
3. 言葉の問題

次にまったく同じ内容のアンケートを団塊の世代（52～53男女100人）に行った。その結果は以下の通りである。

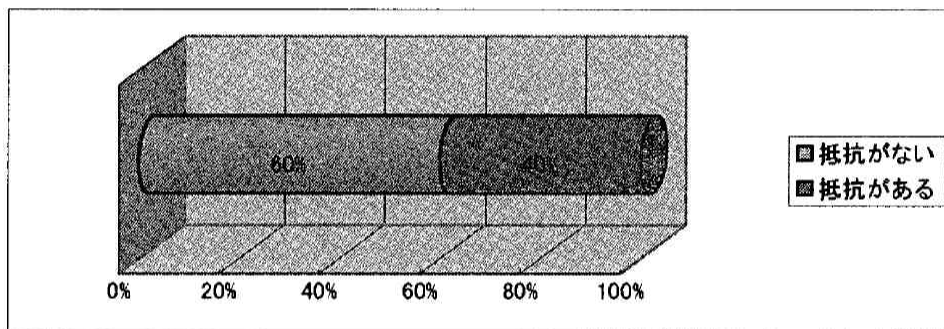
1. 性別と年齢をお願いします。

52歳～53歳

2. 職場もしくはクラスメートに外国人はいますか？



3. 外国人と接触することに抵抗がありますか？（コミュニケーションを取ることを含む）



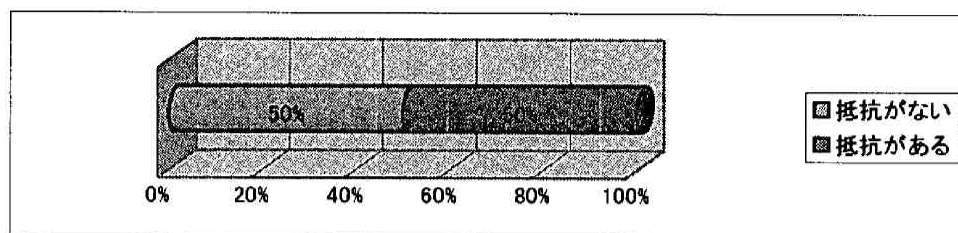
抵抗があると答えた回答者の主な理由としては：

1. 自分とは違う価値感を持っているから
2. 言葉がしゃべれないから
3. 文化が違うから

抵抗がないと答えた回答者の主な理由としては：

1. 新しい文化に興味があるから
2. 言葉を勉強したい
3. 他民族の民族性に興味があるから

4. 日本文化および社会に外国人が入ってくることに抵抗がありますか？



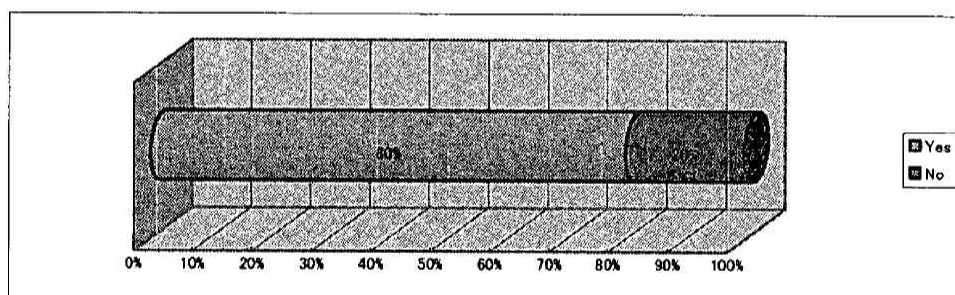
抵抗があると答えた回答者の主な理由としては：

1. 犯罪が増える
2. 外国人と接触するのが苦手
3. 外国人が日本社会に入ることにより，日本文化が変化して結果として自分を見失う可能性がある

抵抗がないと答えた回答者の主な理由としては：

1. 国際化の流れの中で避けられないから
2. 同じ人間だから問題はない

5. 外国の文化に興味がありますか？



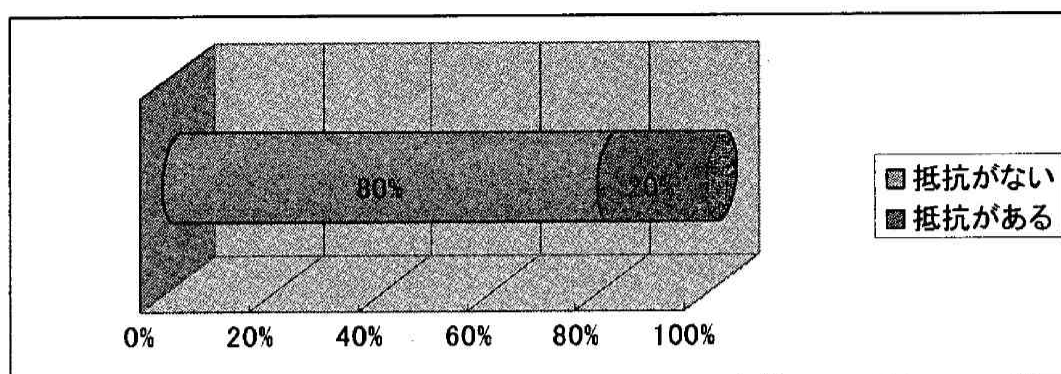
イエスと答えた回答者の主な理由：

1. アメリカに興味がある（経済，合理性）
2. ヨーロッパに興味がある（文化，建築物，芸術）
3. アジアに興味がある（食文化，民族性）

ノーと答えた回答者の主な理由：

1. 日本が好きだから
2. 外国の文化に興味がない

6. 外国語を学ぶことに抵抗がありますか？



抵抗があると答えた回答者の主な理由：

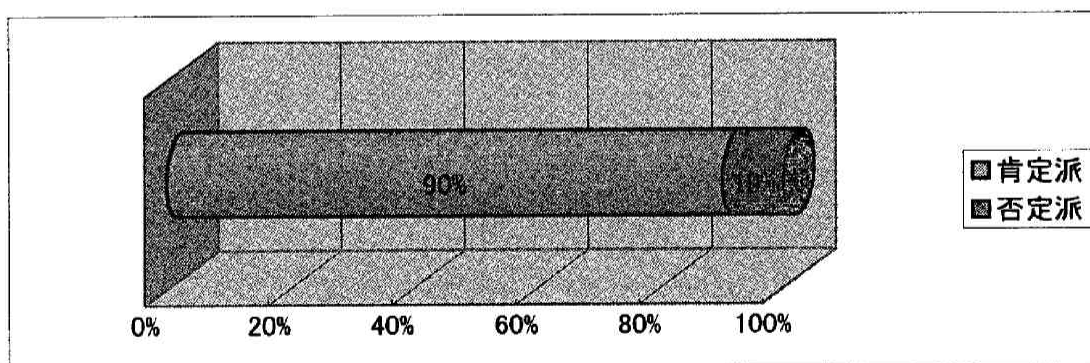
1. 新しい言語を学ぶことに興味がない
2. 外国に興味ない

抵抗がないと答えた回答者の主な理由：

1. 仕事で必要（実際に仕事上で外国人と接している）
2. 新しい言語を学ぶことに興味がある
3. 将来のことを考えて、キャリア・アップの観点から必要不可欠

7. 国際結婚についてどう思いますか？（肯定的ですか？否定的ですか？）

理由をお願いします。



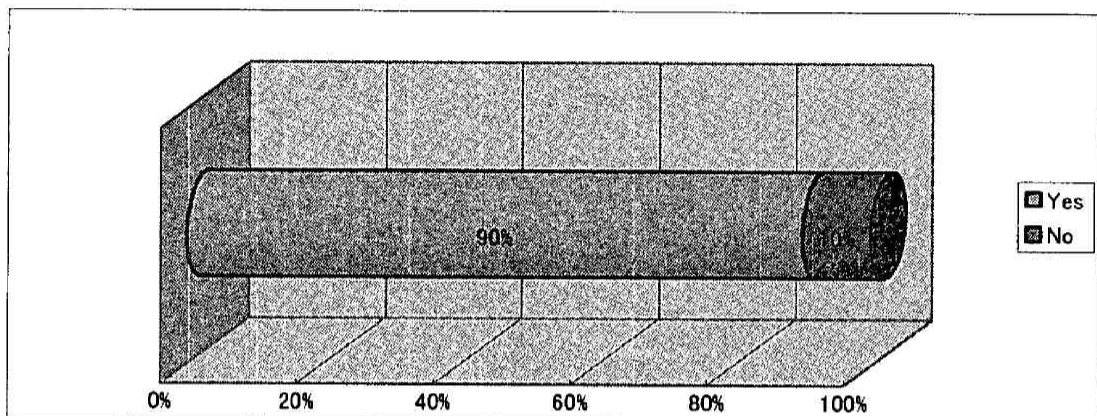
肯定派の主な理由：

1. 人間はみな同じ，外国人も例外ではない
2. 二人の気持ちを尊重すべき

否定派の主な理由：

1. 種の保存の観点から否定的
2. 異文化への違和感

8. 日本で外国人との共存は可能だと思いますか？（イエスもノーの方も理由をお願いします）



イエスと答えた回答者の主な理由：

1. 国際化が進んでいるから共存せざるをえない
2. 心が通じ合えば共存は可能
3. 少子、高齢化の影響で労働力として外国人との共存が必要不可欠

ノーと答えた回答者の主な理由：

1. 治安が悪化する可能性が高い
2. 文化が違うから相容れることは難しい

ま と め

まず初めに断っておかなければならないが、アンケートには両世代の意識をより深く知る為に、それぞれの設問には何問かのサブ・クエスションを設けたが、あえて記述しなかった。しかし、それぞれの設問の後に加えたコメントには、サブ・クエスションの分析結果も加味している事を述べておきた

い。アンケート結果を見てはっきりとしたことは、団塊の世代とその子供達が抱く外国人や、外国文化に対しての意識にはかなり共通点が見受けられたことである。しかし、置かれた環境の違いから相違点も存在した。やはり、仕事をしている団塊の世代の父親の集団は、外で仕事をしているケースが多く、より現実的（仕事に関連した）な見方をする被験者の割合が極めて高かった。一方、団塊の世代の母親の集団は、ハウス・ワイフの割合が多く、どちらかと言うと、異文化への興味は自身の趣味と実益に根ざした回答が多く見受けられた。その違いを除いて、設問の回答に関して男女の性差は影響していないように思われた。

団塊の世代の子供達の場合、学生から被験者を注出したためか置かれた環境に大きな差はなく、設問の解答に関しての性差は特に見られなかった。両世代の決定的な違いは、彼らの結婚観にかなりの相違点があることだ。団塊の世代の両親の集団は、意外にも国際結婚には理解があり、否定的な考えかたをする集団はごくわずかであった。アンケートを実施するにあたり私の予想では、古い価値観を持った両親に育てられた団塊の世代は、表面的には異文化を受け入れる姿勢を示しながらも、本質的には受け入れないものと推測していた。しかし、結果は正反対であった。彼らの殆ど（90%以上）が国際結婚に対して理解を示した。無論、自分の身内には起こるまいと言う打算もあるだろうが、それにしても、彼らの考え方の根底には、異文化を本質的に受け入れようとする肯定的な姿勢が見られることは疑う余地もない。

一方、団塊の世代の子供達の集団における国際結婚に対する姿勢は、肯定派55%そして否定派45%とほぼ拮抗していた。肯定派の理由に団塊の世代とのジェネレーション・ギャップはあまり見られなかったが、否定派に関しては、若い世代はより現実的な問題を想定し、国際結婚に関してネガティブな姿勢をとる集団が多く見られた。おそらく不安定な日本の将来を心配し、団塊の世代と比較すると、何事に関しても慎重に、しかも現実的に捉えているからであろう。彼らが生まれ育って来た日本は、確かに便利で快適な社会構

造ではあったが、10年以上も続く不況の影響で、将来に対して不安を常に抱かなければならない環境の下に置かれていることが、要因ではなかろうか。

最後に日本が国際化したと言い切れるかは別にして、これから日本を支えていく世代が、異文化に対してより慎重な姿勢を示していることを鑑みると、果たして日本は将来本格的な多文化社会に対応できるのか大きな疑問符がついたと言わざるをえない。なぜなら、結婚観は、真の意味で異文化を受け入れられるかどうかを判断する究極の指標と思われるからである。少子、高齢化の影響で、これから先外国人の労働力がより一層必要となることは明白である。いやがおうにも、多文化社会が広がって行く日本にとって、若い世代の異文化に対する姿勢を見ると一抹の不安を抱かずにはいられない。

引証資料

ルース・ベネディクト。『菊と刀』。現代教養文庫，2002。5, 67.

G. ホフステード。『多文化世界』。有斐閣，2000。4-5.

註

- 1 石井敏，広田康夫他『異文化コミュニケーションハンドブック』。有斐閣選書，1998。22.
- 2 渡辺文夫『異文化接触の心理学』。川島書店，2001。147.
- 3 エドワード T. ホール『沈黙の言葉』。南雲堂，2001.
- 4 法務省入国管理局編集『在留外国人統計平成11年度版』。1999。5.
- 5 法務省大臣官房司法法制部編集『第41入国管理統計年報平成14年度版』。2002。430.